

平成20年度

# 研究だより

南部小学校

H20.10.24

No. 7

<兼 子>

第7回授業研究会（10月22日）ご苦労様でした。

1の2・算数科・「さんすうこうえんへ たんけんに でかけよう！」（たしざん）

庄司光代先生の授業から学ぶ

<成 果>

【仮説1について】



- ・「算数公園」という設定で、バッタや栗といったものを取り上げ、前時までの積み上げが興味を引き出していたのではないだろうか。そのことが、本時でのお弁当のおにぎりの数の意欲付けにもつながっていた。
- ・復習としてのフラッシュカード（栗カード）を導入で使用し、10のまとまりを魔法の言葉（数）としたことで、楽しく反復練習に取り組みながら大切なキーワードを頭の中にきちんと定着させることができていたのではないだろうか。

【仮説2について】

- ・わかった（赤）、わからない（白）、はっきりしない（ウルトラマン）と赤白帽子を使って学習中の自分の状態を表したことによって、交流、自己評価、教師の見取りの上でも有効だったのではないだろうか。また、子どもたちも自分の考えをしっかりと意思表示するきっかけにつながっていた。
- ・全体で解き方を考えていく中、自由に発言できる雰囲気の中で4と6（加数分解）でも9と1（被加数分解）でも10のまとまりをつくるのは同じであると、子ども達自らまとめていた。学びを深めることにつながっていたのではないだろうか。

<課 題>

- ・被加数分解のよさに気づかせるためには、ブロック操作が必要だったのではないだろうか。10のまとまりを素早く作るにはどっちの方法が早いかを意識させることによって、加数分解で「できた」と捉えている子にも違う方法を考えさせたい。
- ・違う考えの子の発言を他の子ども達に返してみることによって、自分の考えと比べて考えることができ、交流に深まりが出てくるのではないだろうか。
- ・子どもに考えさせたいところ、教師が教えるべきところを教材研究の中でしっかりと捉え、子どもの考えの混乱を整理してあげる必要があるのではないだろうか。